

育成モノづくり人材

Vol. 30

京都市立京都工学院高校

専門性だけでなくチームで動ける人材を。京都市立京都工学院高校は、市立伏見工業高校の全日制と市立洛陽工業高校の統合により、この4月に開校したばかりだ。分野の枠を超えたカリキュラムで、柔軟に対応できる人材の育成を目指す。立命館中学・高校の旧校舎を改装して活



砂田校長

【DATA】▷校長=砂田浩彰氏▷所在地=京都市伏見区▷学科構成=フロンティア理数科、プロジェクト工学科▷総定員=240人▷主要設備=全館無線LAN、空間情報シミュレーション、レーザー加工機、3Dプリンター▷主な進路(統合前の実績)=JR東海、JR西日本、阪急電鉄、堀場製作所、島津製作所、日新電機、日本電産、関西電力、ジーエス・ユアサコーポレーション、京都機械工具、トヨタ自動車、西日本高速道路、関西大学、立命館大学、同志社大学、龍谷大学、金沢工業大学など

分野超えチームで創造力

用。新たな工業高校の姿を模索している。中心となるのはプロジェクト工学科。伏見工業の建築・土木の強みを生かした「まちづくり分野」と、洛陽工業の電気・電子機械の

体となって取り組む。例えば京都の交通インフラの課題。フロンティア理数科が全体のアイデアを出し、プロジェクト工学科が都市設計や機器の製作を担当する、といった授業を想定する。砂田浩彰校長は「自分の専門を軸にしつつ、専門以外の人と議論して新しいアイデアを生み出す力が、社会に出ると必要になる」と意義を語る。そうした取り組みを進めるためには、大学や企業との連携が不可欠。そこで問題解決型学習(PBL)の先進校である金沢工業大学から研修を受け、教員自身も教育手法を探っているという。



タブレット端末を活用した授業

伏見工業も洛陽工業も長い伝統を誇り、OBには産業界を代表する経営者も多い。ドラマ「スクール・ウォーズ」のモデルとなった伏見工業の荒れたイメージは過去の話。「自分の将来を見据えて入ってきた意識の高い生徒ばかり」と砂田校長は話す。長い伝統と先進的な取り組みの両輪で、工業高校のイメージを変えていく。

(京都・園尾雅之)
(金曜日に掲載)